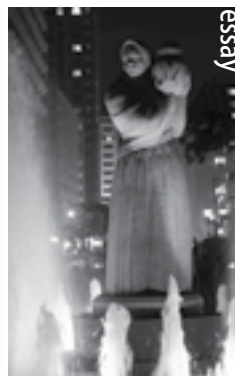


横浜詩人会通信

2015.7.25

№295

横浜詩人会事務局 横浜市西区境之谷 30-19 油本方 TEL045-516-3182
発行人 中上哲夫(会長) 横浜市鶴見区馬場 7-28-15-1 *郵便振替 00230-0-5574 ヨコハマシジンカイ



断層老碌の日録として

石原武

ようやく窓が白み、夜をひき
ずる浅い夢が途絶えて朝、今日
が来たと思う。コーヒーを淹れ
乱雑を極めた机に坐り、ぼんや
りしている、春の小川のオタ
マジヤクシのようにとりとめも
なく想念が動き出す。新聞で読
んだニュース、ネットで捉えた
情報、仲間からの手紙や会話の
断片など、雑多矢鱈にしばらく
意識を騒がせて、大方は言葉に
もならず消えてしまう。結局、
ぼんやり時間と向き合つて、気
儘な釣り人のように、浮子を見
つめ、一日を過ごすのである。

オスカー・グローニングの裁

判の話(ニューヨーク・タイムズ5月1日)は、偶々意識の杭にかかった情報である。オスカー・グローニング(九十六歳)はアウシュヴィッツ強制収容所の元会計係である。彼は少なくとも三十万人の殺しの共犯者として告発され、その裁判が四月下旬にドイツで始まったという。告発者によると、一九四四年の夏、数千人のハンガリーのユダヤ人が牛運搬貨車でアウシュヴィッツに着いたとき、彼は貨車のデッキで、強制労働につかせる者と、すぐに殺す者とを判別する作業の見張をしていたというのである。

オスカー・グローニングは裁判の始めに、ハンガリーのユダヤ人の殺戮について、次のように述べたという。「アウシュヴィッツにガス室がいくつか新たに設置されたので、それが役立つように、ハンガリーのユダヤ人処理は計画されたもので、それ以後、ガス室における処理が習慣化した。何しろガス室の処理は整然として清潔であったか

ら、二十四時間に五〇〇〇人のお世話ができた。強制収容所の日常はそのようなものであった。」

オスカー・グローニングの陳述には「殺し」という文句は一切現れなかった。そしてそれから読み取れる怖さ、異常さを、この情報の筆者は「悪の平凡さ」という言葉で捉えている。

確かに、「整然と清潔に」というグローニングの言葉によって三十万人のいちは見事に軽量化され、ごく平凡に捨てられた。ただ肅然とならずにおれない。

それにしても、何事によらず、「整然と清潔に」とは、なんと恐ろしい言葉であろう。

乱雑な机で、オタマジヤクシのような雑多矢鱈な想念を追いながら、浮子を揺する荒唐無稽な言葉に、いまだにいのちを託している老碌詩人の断層である。

第27回現代詩公開セミナー

「教科書の詩

〜詩の授業にふれながら〜」

講師・高山利三郎氏



講演中の高山利三郎氏

2015年6月28日(日)午後2時から、野毛 Hanahana (はなはな)にて、現代詩セミナーが開催されました。

テーマは「教科書の詩く詩の授業にふれながら」。

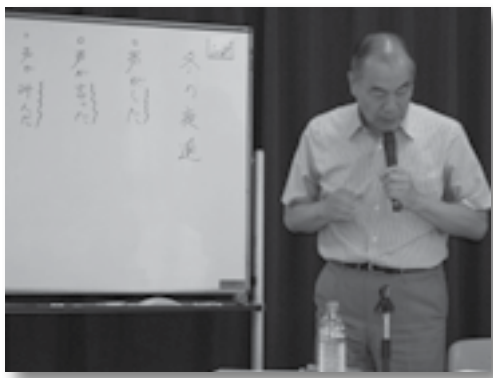
講師は千葉県内の小中学校で国語科の教員をされていた高山利三郎氏です。

広瀬弓担当理事の司会で、中上哲夫会長は、「教科書の詩はあまり覚えてはいませんが、どんな詩があるか興味があります。お話を聞いて刺激を受けたいと思います」と、とあいさつを述べ

られ、高山氏の紹介をされました。栃木県出身の氏は、早稲田大学教育学部卒業後、教員、我孫子市教育委員会、市内小中学校の校長を歴任されました。現在は、千葉県内の小・中・大学で「詩の授業」を実施されています。日本詩人クラブの事業の一環として「詩の出前授業」を各地で展開し、詩を広める活動をされているとのことでした。

の会話がまりました。中原中也の詩「汚れつちまつた悲しみに」の言葉は「よこれちまつた」か「けがれちまつた」のどちらだったかについて話をしていたそうです。そのとき、若い子たちのなかに、いまでも中也の詩は生きていると感じました。詩の一行が子どもたちの心に影響を与えている、ということを実感されたそうです。

の詩の出会いが中学1年の春、教科書のなかだったとのこと。



津村信夫「冬の夜道」について語る高山氏

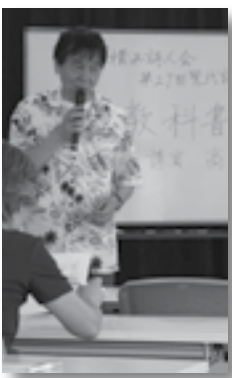
高山講師は参加者にあいさつをし、長年学校で先生をされていたことから話を始められました。またサツカーが好きで、小学校でも指導されていたそうです。何枚もの資料を用意され、話を進めていかれました。

大学で「詩の授業」をしているとき、どういう詩を習ったか、学生に質問してみると、ほとんどが覚えていないとのこと。かろうじて覚えているのは、金子みすゞの詩の「わたしと小鳥とすずと」のタイトルだけ。また草野心平の「河童と蛙」の詩を群読したことがあるという学生も一人いました。

2、今、学校の授業で詩はどのようになっているか

1、はじめに
十年くらい前の現職の頃、ある日ふと聞こえてきた女子高生

高山氏は一例として、新川和江詩集の巻末にあった若い詩人の文月悠光さんの言葉を紹介されました。



あいさつをする中上会長

「言葉ってこんなに表情豊かだったのか——」という一文で、文月さんにとって、新川和江氏

教師からは、「授業で詩は教材としては扱いにくい」、「解釈しにくい」、「何を言おうとしているのかわからない」、「どう教えてよいのかわからない」などと言われて、授業で扱うことは敬遠されるとのこと。また受験問題にも詩は出てこないのので、授業では詩はさつと流されてしまうとのことでした。



司会の広瀬担当理事

3、「詩の授業」の実践例

三好達治「雪」が取り上げられました。小学校の授業では、詩のなかの「太郎」のふりがな(たろうIIたろう)の歴史的仮名遣いを教えるために扱います。詩の内容に触れるのは、中学校になってからのことでした。たとえば筑波山を見たことがあるかなど実体験を聞くそうです。そうして「自分が見たこと、感じたことに誤りはない。感じたこと、考えたことに誤答はない」と伝えます。また生徒たちには、みんなの前で恥ずかしい思いをさせてはいけないということ、「間違っている」と言わないことです。ほかに、友だちの考えたことで、わかると思ったら自分もその気持ちになっ

十分ほど休憩をいれて、津村信夫「冬の夜道」の読みと解釈がなされました。授業でも詩を讀んできかせるとのこと。またこの詩から音が聞こえるとしたら、どんな音だろうなどと質問されます。詩のなかに、「声があった」「声が言った」「声が叫んだ」とありますが、だれがどのように言ったか、など問うそうです。

5、おわりに
高山講師は詩のおもしろさや想像することの楽しさを感じてもらい、豊かな言葉の担い手を育てたい。詩は子どもたちの感性と心を育てるものなので、詩を読むひとが増え、読むことで詩を書くひとが増えてくれればと思う、と結びました。

なっ

4、二つの「詩の授業」実践から
子どもたちからは、「短い詩でも深い」、「想像することが楽しい」、「詩が好きになった」、「もつと読みたくなる」などの声があがったそうです。

最後に質疑応答があり、教師で「詩の授業」を実践している池田高明氏、同じく教師の油本達夫理事長、平林敏彦氏からは「山田今次の詩にある日常の言葉で教えていいのではないか」、「大鹿理恵氏、関中子氏から、講座の内容などについて質問や意見があり、高山氏はそれに答えました。



質疑応答中の池田高明氏

司会の広瀬理事の感想と感謝の言葉でセミナーは終了しました。高山氏の講演はわかりやすく、親しみやすかったです。詩がもつと教科書にも扱われ、詩に親しんでもらえればと思います。二次会は Hanahana 向かいの叶家で行われ、皆さん歓談を楽しまれました。



会場光景

担当理事・広瀬弓
(記事・光富郁埜/撮影・小桜ゆみ)

【参加者】

- 油本達夫、池田高明、伊藤悠子、植木肖太郎、大石規子、大鹿理恵、奥津さちよ、方喰あい子、禿慶子、川崎芳枝、川端進、銀の鈴社・西野大介、草野早苗、小桜ゆみ、小林妙子、坂井信夫、洲史、下川敬明、進藤友佳、菅野真砂、関中子、曾我貞誠、鎮西貴信、富永たか子、中上哲夫、西村富枝、根本明、足田澄、日野零、林昭伸、平林敏彦、広瀬弓、光富郁埜、村山精二、森口祥子(35名)